

協働事業のガイドライン更新に係るポイントの整理

目的：事例より、「複数主体の連携」や「若者の参加」を促進するポイントを整理する。

事例1「小田原竹灯りプロジェクト」

小田原市では、荒廃した竹林が大きな問題になっていることから、伐採して処分に困っている竹を有効活用するとともに、市民が楽しみながらこの問題に触れることができるワークショップ等のイベントを実施するプロジェクトで、NPO法人和の文化塾が中心となり、様々な団体等と連携して取り組んでいる。

[経緯等]

- ①令和3年2月に実施したパートナーシップミーティング「企業・NPO・学校のつながり2020 in 小田原」において、NPO法人和の文化塾、美しい里地里山協議会（おだわら環境志民ネットワーク会員）、ウォータースタンド（株）の連携が実現し、このことをきっかけに和の文化塾がおだわら環境志民ネットワーク※に入会した。

※市内の環境団体・企業・個人の連携・協働を支援し、環境との共生に向けた市民活動の活性化を目指す組織（平成28年3月設立）。森里川海すべてを有する小田原ならではの活動を展開し、豊かな自然資源を次世代に伝えていくことを目標としている。

【会員数】70（令和4年5月31日現在）

（内訳）団体会員31団体・企業会員10社・個人会員29名（顧問3名を除く）

【事務局】環境政策課

「企業・NPO・学校のつながり2020 in 小田原」概要

日時：令和3年2月11日（木・祝）13:30～16:30

会場：Zoomによるオンライン開催

主催：UMECO、神奈川県

内容：第1部は事業者・市民活動団体の協働事例の紹介、第2部は参加者間でつながりの可能性を探るグループワークを行った。

ポイント

- ・各参加者が「協働による地域課題の解決」というミーティングの趣旨を理解し、連携に向けて積極的に話し合った。その結果、美しい里地里山協議会が主催する自然体験イベントにおいて、ウォータースタンド（株）が自社製品で浄水した水を使い、和の文化塾が冷茶体験教室を実施するという連携が実現した。
- ・UMECOの職員により、それぞれの特性を生かした、具体的な連携内容のイメージが持てるようなコーディネートが行われた。
- ・連携をきっかけに新しいネットワークに参加したことで、団体の広範囲な活動をもたらす可能性につながった。

- ② UMECO登録団体でもあるおだわら環境志民ネットワーク会員がUMECOに学生ボランティアの募集について相談したことから連携が進み、プロジェクトのイベントとしてアクティブサロンで「竹細工を作って遊ぼう！」を実施した。UMECOは学生ボランティアグループ「S.P.A.C.E」に声かけし、会員がボランティアとして参加した。

「竹細工を作って遊ぼう！」概要

日時：令和4年4月16日（土）17日（日）11:00～15:00

会場：UMECO多目的コーナー、交流エリア

主催：NPO法人和の文化塾、NPO法人小田原山盛の会、UMECO

協力：学生ボランティアグループ「S.P.A.C.E」

内容：UMECO事業である「アクティブサロン」として実施した。UMECO交流エリアを会場に、竹灯籠、竹とんぼ、竹ぼっくり、竹笛の手作り体験や販売を行った。

ポイント

- ・特にUMECO登録団体には「市民活動の相談ならUMECOへ」という認識が浸透していた。また、気軽に相談できる関係性を構築していた。
- ・寄せられた相談からさらに取組を発展させるべく、UMECO事業（アクティブサロン）としての実施を提案したり、UMECOで行われた同分野の講演会において荒廃竹林に係る取組の出張PRの場を設けるなど、UMECOの強み（様々な支援事業を行うとともに、中小規模の会議室の貸出しも行っていること）を最大限に生かして協力した。
- ・UMECOは普段から学生とのつながりも大切にしており、学生が興味を持つ分野（SDGs、応急手当、郷土の歴史等）の団体を紹介したり、レクリエーション（オリエンテーリングやバーベキュー等）を行うなどの工夫も交えながら、声かけできるネットワークと応えてもらえる関係性を構築していた。

- ③ 「小田原城あじさい花菖蒲まつり」に合わせ、プロジェクトの第1弾イベントとして「竹灯籠ワークショップ&竹灯り」を実施した。UMECOは、相洋高校インターアクト部に声かけし、学生ボランティアを手配した。

「竹灯籠ワークショップ&竹灯り」概要

日時：令和4年6月4日（土）、11日（土）、18日（土）終日

会場：小田原城（花菖蒲園ほか）

主催：おだわら環境志民ネットワーク（参加会員：NPO法人和の文化塾／NPO法人小田原山盛の会／小田原森のなかま／個人会員／FM小田原（株）／（株）T-FORESTRY／Team MAMMA MemmA!／NPO法人虹の会ありんこホーム）

協力：UMECO、相洋高校インターアクト部

内容：日中は竹に穴を開けてオリジナルの竹灯籠を作るワークショップ、日没後は竹灯りを設置し参加者を楽しませた。

ポイント

- ・和の文化塾がリーダーシップをとりつつも、特に行政が調整を行うこともなく、おだわら環境志民ネットワーク会員がそれぞれ独自のネットワークを活用して城址公園管理者等と調整し、実現した。
- ・相洋高校へは、数年前よりUMECOから1年生を対象とした出前講座を行ったり、インターアクト部宛てにボランティアに係る協力依頼を行うなど、学校や生徒との関係構築を図っていた。(本イベントでは活用していないが、夏休みボランティア体験学習やインターシップ受入も行っており、気軽にボランティア体験ができることをPRしている。)

④今後も、UMECOでのアクティブサロン、いこいの森での大規模イベント等、連携を継続する。

ポイント

- ・単発のイベントで終わらせず、随時振り返りを行い、連携強化を図りながら事業目的の達成を図っている。

事例2「おだワクマルシェ」

地域の方にとっては居心地のいい楽しい居場所に、地域の事業者にとっては新たな広がりにつながる場に、関わるメンバーにとっては力を発揮し貢献できる場になることを目指し、現在はお寺の境内で約3カ月に1回、地域商店等によるマルシェを開催している。また、NPO法人小田原まちづくり応援団、「わってらか」こどもあそびと連携しての合同イベント等にも発展している。

[経緯等]

- ①令和3年2月、同じ幼稚園の保護者有志で、マルシェを企画した。当初の名称は「小田原はなぞのマルシェ」で、オンラインで注文を受け付け、購入者が受け取りに来る方式であった。その後、地域のお寺の境内で実地開催することとなり、名称も「おだワクマルシェ」に変更し、イベントを継続している。

「小田原はなぞのマルシェ」→「おだワクマルシェ」概要

日時：令和3年2月～ 約3カ月に1回

会場：オンライン（第3回まで）、大久寺（第4回以降）

主催：小田原はなぞのマルシェ実行委員会→おだワクマルシェ実行委員会

協力：地域商店等

内容：野菜・総菜・お菓子等の販売、ワークショップ（実地開催時のみ）等

ポイント

- ・何もないところから活動をスタートするにあたっては、まずはなぜ行うのかという活動目的を明確化し、共有したうえでできる範囲で企画するよう心がけた。また、活動に参加する意義やできることは人それぞれであり、それぞれがやりがいを感じつつも状況に応じて無理なく関わられるよう配慮した。
- ・情報発信に当たっては、イベントのターゲットを具体的に想定し、魅力を感じていただける内容にすることを心がけるとともに、発信方法を工夫（近隣の幼稚園や地域商店へのチラシ配架、自治会回覧等）することで、活動に参加するきっかけを多くの方に届けるよう心がけた。
- ・イベントを開催する目的や想いも併せて発信するようにすることで、活動に共感し、関わりたいと思っていただくきっかけを増やすとともに、ボランティアの呼びかけなどで実際に参加いただける機会を設けることで、メンバーのすそ野を広げるよう心がけた。

- ②おだワクマルシェのメンバーのネットワークからつながりが広がり、NPO法人小田原まちづくり応援団、“わってらか”こどもあそびと連携してのイベントの開催に至った。

三者連携イベント概要

日時：令和4年3月29日（火）10：30～、5月17日（火）13：30～

会場：旧松本剛吉別邸

主催：NPO法人小田原まちづくり応援団、おだワクマルシェ実行委員会、わってらか実行委員会

協力：地域商店等

内容：ミニおだワクマルシェ、喫茶、こどもの遊び場等

ポイント

- ・人脈や口コミによるネットワークの広がり、大変有効である。（更なる広がりのためには、UMECOのようなコーディネーターが必要）
- ・関係主体の利害が一致していることを前提とした連携であり、内容が3者の希望どおりとなるよう調整した。
- ・調整にあたっては、提供できることと提供できないことを明確にした上で、お互いに無理をしない、無理をさせないことに留意した。
- ・広報は、従来の工夫のほか、NPO法人小田原まちづくり応援団のネットワークを通じさらに拡充した。
- ・イベントはターゲットが参加しやすい平日の午後に設定した。（幼稚園や小学校行事に配慮）
- ・メインターゲットである幼稚園帰りの保護者が喜ぶ惣菜店に入ってもらするなど、ラインナップも工夫した。（参加者にとってのメリットを重視）

[事例以外のポイント]

- ・単にイベントへの参加者を募るだけでなく、地域課題を自分事として捉え、主体的に行動できる人を呼び込める助けになるガイドラインとすべき。関わりたい人が、UMECOに相談すればコーディネート支援を受けられる体制があると良い。
- ・一口に若者と言っても、学生、若手社員、子育て世代などニーズは様々であり、アプローチも変える必要がある。
- ・会員募集、イベント集客等の様々な場面において、参加のメリットを伝えることが重要である。
- ・ロジックモデルで事業を整理し、協働相手を見つけられるような専門性の高いマッチングイベントも実施できると良い。
- ・プロボノのような、専門性のあるボランティア人材情報を集約できると、募集したい団体と参加したい人材の双方にとってプラスになる。
- ・市民活動に関わる人の中にも、活動に誇りを持っている人、気軽にやりたい人など、いろいろなスタンスが存在しているが、まずは参加の敷居を下げるPRが必要である。